

細川ガラシャ夫人

森田草平著



森田草平著

細川ガラシャ夫人



山 川 書 店

昭和二十五年二月二十日 發行

細川ガラシヤ夫人

定價二八〇圓

著者

森田草平もり た そう へい

發行者

荻原俊雄
東京都千代田區神田鑓倉町三番地

印刷所

柏與印刷合名會社
長野市大門町南二一番戶

發行所

山川書店
東京都千代田區神田鑓倉町三番地

分室
會員番號A二二五〇三四番
振替東京一八四六八四番
長野市西長野町二番地



山崎製本所・製本

細川ガラシャ夫人 上篇

天正十年六月三日巳の上刻（午前十時）である。丹後國宮津の城主長岡與一郎忠興は、中國出勢に際して、海岸寄りの砂地に集まつた諸兵を檢閲するために、寢不足の眼をこすりながら、愛馬鬼鹿毛に跨がつて、大手の門を出て來た。その後へには馬廻りの若侍が三四騎従つてゐた。

彼は前の晩夫人おたまの方と別れを惜んで、終宵相手を眠らせなかつた。自分も眠らなかつた。そして、曉方近くとろとろとした時には、早くもおたまの方の聲に呼び覺まされた。見ると、おたまの方は髪も梳り、衣裳も改めて、顔には薄化粧まで施してゐた。障子には薄い日影も射してゐる。與一郎は飛び起きさま、すぐに身支度をして、裏書院に設けられた首途の膳についた。そこには、このたびの出陣を見送るとて、わざわざ田邊（舞鶴）から出て來た父の兵部大輔藤孝も、既に席に着いてゐた。與一郎が座に直ると、おたまの方も一子熊千代を引連れ、二歳になる女兒をも乳母の手に抱かされたまま、しづしづと出て來て、その席に列なつた。かうして内輪だけの盃が、出陣を前にして、改めて親子夫婦の間に交されたが、その間も二度若侍が次の間から顔を出して、「もはや諸兵は廣場に揃つてをります」と、與一郎の出馬を促した。で、與一郎も盃を下に置いて、急いで茶碗の飯を掻つ込むと、そのまま玄關から馬に乗つて飛び出したものである。

大手の門の上には、未だ梅雨の明け切らぬ、どんよりとした空の下に、鳶が一羽舞つてゐた。與一郎はそれを見上げて、

「ほう、今日は晴れるな」と呟いた。

「は、東の空にはもう雲が切れてまゐりました。天氣は大丈夫でござります。」

後につづく馬廻りの一人が台榎を打つた。が、與一郎はそれには答へないで、馬に一鞭當てた。

間もなく門前の町家を離れて、海岸の砂地に着く。廣場の入口には、家老松井胃助康之を始めとして、與一郎の弟頼五郎興元、米田助右衛門是政、有吉四郎右衛門立行、志水次郎大夫清久等、長岡家譜第の侍大將どもが出迎へた。與一郎はこれ等の人々をうしろに従へて、すぐに諸兵の見分に取りかかった。

長岡家の領地は、天正八年中織田信長から丹後一ヶ國に封ぜられて以來、祿高十二萬三千五百石となつてゐたが、その中には在來の國侍で、長岡氏に降つて、今なほその領土を保有してゐる者もあつたから、實際の收入はせいぜい八、九萬石、十萬石は出でなかつたらう。當時は祿一萬石について、雜兵、人足取り交ぜて二百五十人づつ出す掟になつてゐたから、この廣場に集まつた人數も、總體でまづ二千餘と見て置けば間違ひはない。それを五部隊に分つて、松井以下の侍大將が率ゐることになつてゐた。その中には足輕どもによつて編成された槍隊、弓隊、鐵砲隊といふやうな常備兵もあつた。ただし鐵砲隊は、當時まだ鐵砲が貴重品であつたから、全部で二百挺に充たなかつた。なほその

外に小荷駄、大行李などの大部隊が附屬してゐたことは云ふまでもない。

與一郎は一顧見て廻つたが、兵の軍装にも小荷駄、大行李にも別段不足はなかつた。何しろ彼は春信長の甲州攻めのお供をして、美濃路から信州伊奈を経て甲府に出で、更に駿河から遠州濱松を廻つて、四月の末に本國へ歸つて來たばかりだ。その時もこれだけの人數を率ゐ、何時でも戰場へ出られる準備をして出掛けた。今度はその繰返しに過ぎないから、軍装その他に一應手落ちがないのは當然でもあつたらう。

ただ甲州攻めの際には、與一郎は信長のお供をしたといふだけで、戰場には一度も出なかつた。信長一行が伊奈へ入つた時、武田氏は早くも滅びて、天目山に立籠たてこもつた主將勝頼は既に首を先鋒隊の瀧川左近將監に授けてゐたのである。當年二十歳の與一郎は腕が鳴つてたまらなかつた。尤も、一旦甲府へ入つてからの凱陣には、岳父しやうと明智日向守光秀が路次の警護の總指揮官となり、與一郎自身その露拂ひを承はつて、東海道を押上おしつた。それは面晴おもれのする役廻りには相違なかつた。が、武士として一度も戰場に出なかつたといふことは、何としても残念だ。せめて今度の中國攻めにはと、與一郎は固く心に誓つてゐた。

で、一巡閱兵を終つた時、彼は再び空を見上げながら、

「うむ、追ひ追ひ空も晴れて來たな」と云つた。

「左様。」

すぐ後に續いてゐた松井胃助は、たださう云つたばかりであつた。

すると、三番目につづいた有吉四郎右衛門がそれを承けて、

「朝疊りの後晴れぢや、幸先は好うござる」と應へた。

「はゝゝゝゝゝゝ」と、與一郎は心地よげに笑ひながら、「何うぢや、爺」と胃助に向つてたづねた。

「おれ達の行き着くまで、高松の城は持ち怏へるかな。」

「さ、それは行つて見なければ分りますまい」と、胃助は毎もの癖で、むっつりと云つた。「ぢやが、毛利方の城は他にいくらかござる。」

「それでいい。」

「それで宜しければ、わしは先手ぢやから、一足先に出發しますでな。」

「さうしてくりやれ。」

胃助はすぐに馬の首を旋して、先鋒隊の方へ駈け出して行つた。間もなく先手の兵はしづしづと運動を起して、海岸づたひに、西の方但馬街道へと百足蟲の匍ふやうに繰出した。

それを見送ると、與一郎はすぐに城中へ取つて返した。もう一度おたまの顔が見たかつたのである。で、玄關にかかつて、ひらりと馬から降りると、武者草鞋のまま、

「来るな、来るな」と供の者を制しながら、つかつかと奥の間へ這入つて行つた。

奥の間には、おたまの方が一人で與一郎を待つてゐた。そして、良人の顔を見ると、

「あなた！」と云ひながら、すぐに起ち上つて、傍へ寄つて來た。與一郎も立つたまま、いきなりおたまを抱き寄せた。

二人とも無言であつた。が、しばらくして與一郎がおたまの顔を覗くと、その美しい睫毛は露に濡れてゐた。

「ほう、そちや泣いてゐるな。」

おたまの方はその涙を隠すやうに、顔を良人の胸に摺りつけた。

「ふうむ、こりや可異なかしい。いつの出陣にも、ついぞ泣顔を見せたことのないそなたが、今日に限つてその涙は……」

「いえ、何でもござりませぬ、何でもござりませぬ」と、おたまはいよいよその顔を隠すやうにした。

「でも、これには譯があるぢやらう？」

「譯も何にもござりませぬ。ただこの頃は何やら涙脆なみだもろうなりまして——大方身體おほからだのせゐでもござりませう。」

「身體のせゐと云ひやると——では又……？」

おたまの方も今年二十歳、與一郎の許に入興もとふしてからはや五年目になるが、一子熊千代四歳の外に、二歳の息女まで儲けてゐたのである。

「いえいえ、そんな事は未だございませぬ」と、おたまはあわてて云ひ消しながら、良人の胸から離れようとした。が、與一郎はそれを放さうとせず、なほもしつかりと相手を抱き締めたまま、

「わしはそちのさうして泣いてくれるのが嬉しいのぢや。これまでそちは餘りに氣が強うてな、何時の出陣にもついぞ涙を見せたことがない。わしにはそれが物足りなかつた。近頃めづらしくそちの涙を見て、わしは嬉しいぞ。」

さう云はれたのがおたまも嬉しいか、そつと男を締め返した。與一郎はぞくぞくして、

「なあ、おたま、そちが泣いてくれるのは嬉しいが、ついその譯を云うてくれたら、なほ嬉しいから。云うてたもれ、云うてたもれ」と掻き口説いた。

「それは——もう云はれませぬわいな。」

「なに云はれぬ！ 云はれぬとあれば、まづわしから云はうか。さて何から云うてよいか。云ふことが澤山あつて、何から云ひ出してよいか分らぬ。さう、人は戰場へ出ては、まづ家を忘れ、妻子を忘れると云ふ。ぢやが、わしは一度もそちのことを忘れたことがない。危い所へ出れば出るほど、そなたの姿が目にならつく。そなたがわしと一緒にゐてくれるやうな氣がするのぢや。何うぢや、わしは女々しい男かな。」

「いえいえ、そのやうな事はござりませぬ。」

「ただわしはそなたのことを思ふと、一層勇氣が出るのぢや。そなたがわしの傍にゐて、わしのこと

を見張つてゐてくれるによつて、わしは何んな事があつても殺される氣遣ひはない。さう思つて、勇氣が百倍するのぢや。」

「お嬉しうござんす。」

かう云つて、二人はまた抱き締め合つた。

「でも、このたびの御出陣は定めし長くなることで御座いませう」と、しばらくして、おたまは良人の耳に囁いた。

「うむ、それは昨夜も云ふ通り、相手は聞ゆる毛利方だ。落目に向つた甲州勢のやうに、さう早くは片附かぬぢやらうな。」

「わたしはそれが悲しうござります。」

「よう云うてくれる！」と、與一郎は抱いてゐた兩腕を弛めて、おたまをそこに坐らせた。そして、自分もその前に胡坐を掻きながらつづけた。「ぢやが、このたびの出陣は、わしに取つては又とない手柄の立て時だ。今度こそ俺も男になつて歸るぞ！ さう思つて、そちも辛抱してたもれ。」

おたまの方もじつと男の顔を見返じてゐたが、「でも、殿方といふものは、何うしてそんなに手柄が立てたいのでございませう？」と、その眼を庭の方へ逸らしながら、「所領もこれほどあれば、もう好いではござりませぬか。」

「はゝゝゝゝゝ、その氣持ちは女子には分らぬて——」

さう云ひかけた時、玄關げんくわの方に當つて、どやどやと人の聲あしおとがして、がやがやと立ち騒ぐ物音が聞えて來た。與一郎も何事かと一寸振返つたが、「ふむ、皆が待ち兼ねてゐると見えるな」と、ひとりで合點しながら、

「では、もう行くぞ!」と、もう一度おたまの手を取つて引寄せた。おたまの方もされるがままになりながら、

「はい、わたくしとしたことが、お出ましの際きはにひよんな事を云ひ出しまして……」

「もういい、いい。わしはそなたの心を胸に抱いて行く。そなたもわしがことは始終この胸に抱き締めてゐてくりやれ。」

「それはもう、忘れることではござりませぬ。」

二人は又ひしと抱き合つた。

その時襖越しに、若侍の聲として、

「殿、殿! 京都から火急のお飛脚にござります」と歟鳴る者があつた。

「なに、京都から——?」

「御家老米田壹岐守様のお使者つかひにござります。」

「あゝ米田の爺ぢいからか、分つた!」と云ひながら、與一郎はすぐに起ち上つて、襖の外へ出た。「それにしても、壹岐守から火急の用事とは何だらう?」

「はッ、それは分り兼ねますが——」と、そこに手を突いてゐた若侍は、與一郎がその前を通り過ると、自分も立ち上つて、主人の後に附添ひながら、「何でも米田様の御書面を持参したと申しまして、土足で奥へ駈け込まうとしますので、一同それを取抑へてゐる所でございます。餘程取り急いでゐる體に見受けました。」

「ふうむ？」

與一郎は首を傾げながら、あたふたと表書院の方へ出て行つた。

二

米田豊岐守求政は、五月二十九日信長が中國親征のために安土から上洛して、本能寺の旅宿に入るのを機會に、信長に面接して、かねて頼まれてゐた佐久間右衛門尉信盛の一子甚九郎正勝のために、その勘氣御赦免を取倣してやらうと、與一郎の父幽齋が兩三日前から京都へ遣はして置いたものである。佐久間右衛門尉信盛は織田家譜第の老臣であつたが、大阪本願寺攻めに天王寺の在番として入れられながら、曠日彌久、永年の間それを攻め落すことが出来なかつたといふ罪に座して、天正八年中本願寺の落城と共に父子とも高野山に追はれ、そこにも坐たたまらないで、更に紀州熊野方面を流浪してゐた。その間に父信盛は病死したが、倅甚九郎はこの頃父の知普たる兵部大輔藤孝を手頼つて、

信長へ歸參を願はうと思ひ立つた。幽齋はまた快くそれを引請けた。彼はよくかうした取做しを頼まれたものだが、それは又彼が信長に對して、さういふ口の利ける間柄であつたからに外ならない。何しろ信長の旗上げに際して、足利十五代將軍義昭を信長に引合せ、彼が兵を京師に進める絶好の名目を作つてくれたものは、他ならぬ藤孝自身であつた。その後信長は義昭を追うて自立したが、幕臣の多くは義昭に隨つて京師を去つた中に、一人藤孝は轉身して信長の下に留まつた。しかも、その藤孝は足利家隨一の忠臣と見られてゐた人である。この人が主君義昭を見切つて信長に隨身したといふことは、世間の眼から見て、何れだけ信長の面目を救つてくれたことであらう。とんないきさつから見ても、信長は無下に藤孝の請ひを斥けることの出来ない事情にあつた。幽齋もそこを見込んでゐたが、世故に馴れた老練家のこととして、決して無理押しはしなかつた。物には凡て時機といふものがある。彼はただその時機を待つてゐた。

ところが、今度の信長の中國親征である。凡て歸參を願ふものは、主君の出馬に際して、その馬前に願ひ出るのが一番いい。主君も役に立つほどの者は一人でも餘計に欲しいと思つてゐる際だから。で、本來なら幽齋自身上洛して、信長に面接の上、甚九郎の取做しをしてやるべきだが、今度の親征には與一郎もお供をすることになつてゐた。幽齋自身は出勢の中に加はつてゐなかつたが、わが子の不在中分國を明けて上洛するわけにも行かない。已むを得ず、老臣米田豊岐守を派遣して、自分に代つて甚九郎の取做しをさせることにした。豊岐守はもと米田宗賢といひ、幕府の薬師で、嘗て藤孝と

計つて、南都一乘院から門主覺慶——後の將軍義昭——を救ひ出すことに成功した。この時宗賢の手で覺慶が救ひ出されなければ、後の將軍義昭もなければ、信長の旗上げもない。さういふ手柄もあつて、彼も信長とはかねて親交があり、陪臣ながら、何時でも信長にお目見えの出来る間柄にあつたから、それでこのたびの使者にも選ばれたものである。

それにしても、さういふ用件で上洛してゐる壹岐守から、火急の飛脚とは？ 與一郎には一向合點が行かなかつた。で、つかつかと玄關の次の間へ出て見ると、衝立の蔭に、年の頃は四十あまり、一人の僧形の男が兩腕を取られたまま、何やら若侍どもと云ひ争つてゐた。そして、與一郎の姿を見ると、

「殿、殿、米田壹岐守の家來、早川道鬼齋めにござります。火急のお使ひ……御書面を持つて参りました……殿、殿！」と、息を切らしながら喚き立てた。

「かやうに申立ててをりますか」と、兩腕を抑へてゐた若侍どもは同音に言葉を添へた。「何分にも御門を駈け破り、泥足のまま御奥へ駈け込まうとしますので……」

「それどころか、一大事でござりますわい」と、僧形の男はなほも喚きつづけた。「この密書は是非とも殿様へ、ぢきぢきお渡し申せと固く申附けられてまゐりました。それ故……それ故股者の身で失禮とは存じながら……」

「うむ、よし分つた！」と、與一郎はそこに突立つたまま、始めて口を開いた。「では、その書面を

早く渡せ。兩人とも、その腕を放してやれ。」

兩腕を放されると、「御免！」と云ひながら、道鬼齋は與一郎に背を向けて、肌を押しくつろげた。そして、襦袢の襟を解いて、その中から一通の書面を取出すと、

「これにござります」と云ひながら、與一郎の前に差出した。

與一郎は手づからそれを受取ると、すぐに封を切つたが、若侍の持つて來た床几に腰を下ろして、さらさらと目を通し始めた。が、見る見るその顔色は變つて、書面を持つた手もいささか顫へるやうに見えた。與一郎はそれを押咍へるやうにして、やつと終りまで讀み通すと、また後戻りをして二箇所讀み返したが、そのままぐるぐると巻き納めながら、

「こりや道鬼齋とやら」と、力めて何氣ない體に聲をかけた。「そちや壹岐守の供をして、京都の大變を逐一見て廻つたとあるが、さうぢやな？」

「はッ、左様にござります」と、道鬼齋は一禮して答へた。「寄手の旗印まで、この眼でしかと見とどけて參りました。」

「ふうむ！」と、與一郎は又しばらく考へ込んでしまつた。が、何と思つたか、傍へにゐた若侍を振り返つて、「そち大殿のところへ行て、火急御相談したいことがござれば、表書院までお出で下されと申してまわれ。」

「はッ」と答へて、若侍が立つて行くと、